
また逢う日まで

総威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また逢う日まで

【Nコード】

N7608S

【作者名】

総威

【あらすじ】

銀魂の登場人物、坂田銀時、桂小太郎、高杉晋助たちには堂名嘉美^{きみ}来という忘れられない女がいた。ある日、銀時のもとにやってきた美来。それからまあいろいろあったが平和に暮らしていた。そんなところに神威たちが江戸を消滅しにやってきた！美来たちはそれをどうやって止めるのか・・・

プロローグ

それは私が6才のとき・・・

「私のところに来ませんか？」

そう言われたときうれしかった。

今までみんなに邪魔者扱いされていたから。

私なんて生きる意味なんてないと思ってたから

ホントにうれしかった。

私を必要としてくれる人がまだいたんだって思った。

私は生きててもいいんだってそう言われた気がした。

だから私は、私を必要としてくれた先生に言葉じゃ言い表せないくらい感謝している。

なのに・・・

なのにアイツらは先生を殺した。

だから私はアイツらを許さない。

この時私は決めたんだ。

先生を殺したアイツら

殺してやるって・・・。

第1話

その日は今にも雨が降りそうな曇り空だった。

美來「やめて！！先生に何するの！！」

気絶している松陽を連れ行こうとするそいつに美來は飛びついた。

だが、子供が大人の力に勝てるわけもく、

？「触るな」

そいつは静かにそう言つと美來を蹴り飛ばした。

桂「美來！」

那琉琥「お姉ちゃん！！」

桂と弟の那琉琥は美來に駆け寄った。

美來「ゴホッ！ゴホゴホ」

那琉琥「お姉ちゃん、大丈夫！？」

それを見た銀時と高杉は剣を持ちそいつに飛びかかった。

銀時・高杉「っ！先生を離せエエエエエエ！……！！」

美來「っは!!」

またこの夢・・・

もう忘れたはずなのに・・・

私は今、次の仕事に向かっている。

私の仕事は“殺し屋”

自分でもなんでこんな仕事をしてるかわからない。

なんでも私の雇い主が「お前の強さはすごい！」とかなんとか言っていたのを覚えてる。

まあでも自分でも強いとは思ってる。

でもこんなことをするために強くなったわけじゃない。

人を殺すために強くなりたかったわけじゃない。

ただ守りたくて

先生や那琉琥、銀時や高杉、桂君やみんなを守りただけ・・・

ただそれだけだった。

なのに守れなかった。

先生やみんなを・・・

守れなかった。

第2話

はー。

着いた・・・

あのクソじじいのせいで余計な体力を使ってしまった。

それはさかのぼること40分前。

？「お嬢さん隣いいですか？」

美來「あ、はいどうぞ」

？「どうも、ありがとうございます。あ、わしの名前は小杉といいます」

未来「あ、そうですか」

なんだよこのじじい。誰もお前の名前なんて聞いてないよ。

小杉「そちらは？」

なんで私がこんな赤の他人に名前教えなきゃなんないんだよ。

美來「あ、私はくみです」

もちろん偽名だ。

小杉「くみさんはどちらに行くんですか？」

美來「えつと歌舞伎町です」

小杉「そうなんですか。わしも若いころは歌舞伎町で遊んでたんですよ。あー元気にしてるかな綾乃ちゃん。」

そんなこと知らないに決まってるだろ。なんだよこのクソじじい。綾乃って誰だよ。

小杉「あ、綾乃ちゃんはね団子屋で働いてたかわいい子でね、そりや毎日通ってましたよ。そのおかげで体重はどんどん増えていくもんでホント参りましたよ。アハハ。しかもね」

まだしゃべるのかよこのクソじじい。

アナウンス「次は――駅――駅お降りの方は足元にお気をつけてお降りください」

小杉「あ、ここだ。じゃあ私はここで綾乃ちゃんに小杉がよろしく言っていましたっていつといてください。ではまた今度」

何なんだ、あのクソじじい。

しかも私が知ってるわけないだろ！！

結局綾乃って誰だよ！

それに50年位前って言ってたじゃん！

生きてるかどうかもわかんねーよ！

50年もたってるんだから化け物みたいになってるよ！！

そんな化け物にどうやって言えばいいんだよ！

しかもまた今度ってもう会う予定なんかねーよ！！

ていうかもう会いたくもねーよ！

それであのクソじじいは結局何が言いたかったんだ！！

あーなんか考えれば考えるほどむかついてきた！

アナウンス「かぶき町駅、かぶき町駅お降りの方は足元にお気をつけてお降りください」

まああのクソじじいは忘れて仕事しよう！

第2話（後書き）

なんか今回ぐっだぐだでした。

すいません。

次回

銀さんと会うかもです！

会わないかもしれません。

お楽しみに！

第3話

真撰組屯所前

PM 7:00

確かこの辺だったはず・・・

真撰組 副長 土方

こいつを 殺せ

金は**公園のベンチの下にある。

真撰組の人ならここにいるだろう・・・

でもこんな奴殺して捕まったらどうしよう？

プルルルルルプルルルルル

美來「はい。美來です」

雇い主「あ、美來？その真撰組の奴を殺すのあったじゃんかーそれもうしなくていいよー」

美來「は？なんで」

雇い主「じゃあねー」

美來「あ！ちよつと！」

プープープープー

何なんだアイツは！

仕事もなくなつたしもう帰ろっかな。

近藤「そこで何してるんだ」

ゴ、ゴリラ！？

じゃなくて・・・

美來「えっと、あの仕事で・・・」

近藤「仕事？」

この服、真撰組の人だよな

美來「えっと、あの仕事・・・そう！仕事を探してまして・・・」

我ながら見苦しい言い訳・・・

信じるわけないよね・・・

近藤「そうか、じゃあ真撰組の女中をやればいい！一昨日^{おとこい}ちょうど1人やめてな。人数が足りなくて困ってたんだ」

・・・は？

近藤「じゃあ明日また真撰組に来てくれ！待ってるぞ！私の名前は近藤だ」

美來「あ、あの、ちょっと待ってください！」

近藤「じゃあな」

近藤はそのまま走って行った。

あ、ありえない！

人の話を最後まで聞けよ！ていうかあの嘘を信じるなんてどんだけバカなのよ・・・

まあ明日ちゃんと断ろう。

まあそれは良いとして、今夜の宿どうしよう・・・

さっさと仕事終わらして（殺して）帰る予定だったから宿に泊まるお金なんてないし・・・

しかたない野宿かな・・・

ていうかさっきからすごく見られてるんだけど。

・・・と、怒っているが、

美來は顔のバランスが整っていて世間でいうと美人という分類に入る。

だから見られるのは仕方なかった。

スタイルもいいから昔からモテていた。

だけど鈍感なのでそんなこと全然きずいていなかった。

まあいつか、とりあえず公園にでも行こうかな。

第4話（前書き）

右手負傷中にて打ち間違いがあるかもしれません！！

誤字脱字等ありましたら、

感想のところに書き込みください。

第4話

美來はお金がないため公園で野宿することになった。

ベンチの上に座り寝る準備をしようとした。

・・・が、むこうから人が来る気配がした。

美來「・・・誰？」

長谷川「よー、お嬢ちゃん何してんだい？」

げ、何このおっさん。

酔ってる？

長谷川「お嬢ちゃん？キレイな髪だねー、ヒック。金髪でキレイだねー」

完全に酔ってる！！

すごい酒臭いし。

美來「あ、あのちょっと近寄らないでください。」

長谷川「いいだろー、あつ、お嬢ちゃん名前は？俺の名前は長谷川って言うんだけど」

美來「もう、うるさい！！しかも酒臭い！！」

長谷川「お、お嬢ちゃん？」

美來「もう私の前から消えて。」

長谷川「あ・・・」

長谷川さんが美來の言葉にショックを受けていたらむこうから5、6人の男の集団がこちらに向かってきた。その男たちは美來に話しかけてきた。

男a「お、かわいい子発見！」

げ、またなんか増えた。こいつらも酔ってるし・・・

男b「そんなおっさんとおらんで俺らとええとこ行こうやな？」

第4話（後書き）

すいません

今回ちょっとていつかだいぶ中途半端な終わり方です><

次回は銀時目線です。

第5話（前書き）

右手負傷中にて打ち間違いがあるかもしれません。

そこはご理解ください。

第5話

銀時 said

銀時「おい新八、ジャンプ買って来い」

新八「嫌ですよ。自分で買って来てください」

神楽「私の酢昆布も買ってくるアル」

・・・と言いながら神楽は酢昆布を食べている。

新八「嫌です」

神楽「新八のくせに生意気アルな」

銀時「ていうか今日なんでお前いるんだ？」

新八「そんなこといいからこれ買って来てください」

神楽「じゃあ私はもう寝るアル」

新八「じゃ、よろしくお願いしますよ」

銀時「・・・っち。わかったよ、行けばいんだろ行けば」

帰り道

しかしアイツら最近俺の言うこと全然聞かなくなったなー

新八は絞めるとして・・・

神楽は・・・

逆にやられるよな・・・

男b「そんなおっさんとおらんで俺らとええとこ行こうやな？」

おーナンパかどれどれこの銀時様が見てやろうじゃないか。

あー男のほうは残念な顔だな・・・まーナンパする男なんてそう顔がいい奴なんていないよな。顔がよかったら女のほうがよくてくるに決まってるし。

女のほうわつと・・・

あ、女いた。

え・・・あの金髪って・・・

美来！？

なんでアイツがここに・・・

銀時「・・・クソッ！」

銀時は美來のいる公園に走って行った。

第6話

男a「おい、おっさん。さつさと消える」

長谷川「す、すいません。じゃあねお嬢ちゃん」

美來「あ・・・」

あのおっさん逃げやがった。最低だよ、あのおっさん。

男a「邪魔者も居なくなっただしええとこ行こうや。な？」

美來「・・・」

もうつるさいな。

銀時「女相手に何してんだよ」

男b「ああん！？なんやお前」

そこに1人の男が走ってきた。

この人見たことある。誰だっけ……。あ、あの銀髪、もしかして

美來「・・・銀時？」

銀時「よお、久しぶりだな。ていうか今俺のこと忘れてただろ」

美來「あ、ばれた。えへへ。それにしても久しぶりだね。元気だった？」

銀時「えへへ、じゃねーよ。お前は相変わらずだな」

男b「おい、なんだよお前。いきなり出てきて、人をムシすんなよ」

と、言いながらその男bは涙目になっていた。

え、なんで涙目？気持ちわるつと美來と銀時は思っていた。

男b「もういいよ、帰るよ。お前たちは感動の再会でもなんでもすればいいだろ！！どうせ俺らなんて・・・」

男a「もういいよ、俺ら帰るからあとごゆっくりどうぞ。おい、お前ら帰るぞ。」

手下たち「はい！覚えてろよ！！」

と、みんなお決まりのセリフを言いながら走って行った。

美來「え？何、今の？あの人たちなんだったの？」

銀時「さあ、まあいいんじゃないの？」

つとぼけーとしていると。

美來「・・・うっ！」

銀時「美來っ！！どうした、アイツらになんかされたのか！」

美來「お腹が・・・」

銀時「お腹が？」

美來「・・・減った」

銀時「・・・はアアアアア！！？？？？」

ボタン。

美來はそこで意識がなくなった。

銀時「・・・もう仕方ねえなア、よいしょと」

銀時は美來をお姫様抱っこし万事屋へと帰って行った。

第6話（後書き）

キヤ

！！

私もお姫様抱っこされたい！！なーんて（笑）

まあここはスルーしてください。

第7話

万事屋到着。

銀時「おーい、帰ったぞー」

すると中から新八と神楽が走ってきた。

パタパタパタ

神楽「銀ちゃん、酢昆布買ってきたアルかー？」

新八「銀さん遅いじゃないですか！心配しましたよ！」

銀時「おう、悪かったな」

新八「銀さん、その子どうしたんですか？もしかして・・・」

と、言いながら新八は銀時を軽蔑のまなざしで見ていた。

もちろん神楽も。

銀時「あ、こいつはなア」

説明しようとしていると、神楽がいきなり銀時に向かって走り出した。

神楽「ホワタアアアアア！！！！！」

と、言いながら銀時の顔に蹴りを食らわす。

銀時「グハアアアア！！！」

同時に銀時の腕にいた美來が落ちそうになったのを受け止めようとしたが、受け止めきれずに美來は頭を打ってしまった。

ゴンッ！！

美來「痛った！！何！？何が起こったの！？」

神樂と新八が美來に駆け寄り、

神樂「大丈夫アルか！？ごめん、私のせいアル！ホントに大丈夫アルか！！؟؟」

美來「あ、えつと大丈夫だけど、あなたたち誰？ていうか私なんでもここにいろの？ていうか、お腹減った・・・」

新八「銀さんに

神樂「銀ちゃんに誘拐されたアルよ！！覚えてないアルか！？」

美來「銀さん？銀ちゃん？・・・え！？私、誘拐されたの！？もしかしてあの男たちに！？でもアイツら泣きながら逃げた気がする・・・」

神樂「逃げてった？男たち？何言ってるアルか！？」

新八「か、神樂ちゃん落ち着いて！！とりあえず銀さん中に入れて

話しましょうよ」

神楽「そ、そうアルな。銀ちゃん、早く起きるアル！」

そう言いながら銀時にビンタを食らわす。

す、すごい女の子だな・・・って、あれ銀時？でも銀時ってあんなに老けてたっけ??

銀時「痛えよ！！もうちょっと優しく起こせ！！」

新八「とりあえず中に入りましょう。近所迷惑です」

銀時「お、おう」

まあ、いいや。私はもう帰ろつと。

銀時達に黙って帰ろつと一歩踏み出そうとしたとき新八に声をかけられた。

新八「あのアナタもどうぞ」

神楽「そうアル。アンタがいないと始まらないアル！」

そう言いながら神楽は美來の手を引っ張り中に入れる。

そして新八は銀時の手を引っ張り部屋の中に連れ込んだ。

第8話

神楽「・・・で、どういうことアルか？ちゃんと説明するアル」

えーと、なんでこんなことになってるんだ？

はい、よく考えよう。

お金は大事だよ・・・。

って、そんなこと言ってる場合じゃなかった。

それにしてもこの人ホントに銀時なんだろうか？

さっきは暗くて、半泣きの男が気持ち悪すぎてこの人の顔ちゃんと見てなかったもんなー。

銀髪だから銀時なんだろうけど・・・銀時ってこんなに老けてたっけ？もうちょっとカッコ良かったような・・・

でも、さっきから『銀ちゃん』って言ってたからそうなんだろうけど・・・

でも昔のほうがカッコ良かったような気が・・・

銀時「あの一、美來さん？」

美來「は、はい！何でしょうか？」

銀時「さっきから心の声ダダ漏れですよ？銀さんそんなに言っほど老けてませんからね！！」

美來「・・・ほ、ほんと？」

銀時は黙ってうなずいた。

新八「と、とりあえず自己紹介しましょうか。僕は志村新八です。」

なんかパツとしない顔だなー。

自己紹介されても覚えられる自信ないよ・・・。

そんなことを美來が思っていると新八が突然立ち上がった。

新八「どうせ僕はパツとしない顔ですよ！仕方ないじゃないですか。僕だって好き好んでこんな顔になったわけじゃないんですから！！」

と、言いながら新八はトイレに駆け込んだ。

美來「あれ？もしかしてまた声に出てた？」

銀時に聞くと、

銀時「ああ、最初っから最後まで全部口に出てた」

美來「う、うそ！どうしよう。悪気があったわけじゃなかったの！あ、謝らなくちゃ！！」

と、立ち上がろうとしたとき銀時に腕をつかまれた。

銀時「そつとしといてやれ」

美來「う、うん」

神楽「そうアル、あんな駄メガネのことなんかほつといてもいいアル。次は私の番アル！」

だ、駄メガネって私よりひどいことを・・・

神楽「私は神楽アル！銀ちゃんのご主人様アル！そしてかぶき町の女王様でもあるアルよ！」

美來「銀時のご主人様なの！銀時がお世話になってます」

銀時「いや、違うから！美來も信じなくていいから！」

新八「そうですよ、嘘はいけませんよ神楽ちゃん」

美來・神楽・銀時「あ、戻ってきた」

新八「・・・いいから自己紹介の続きしましょうよ！」

美來「あ、次私か。私は堂名嘉美來って言います。銀時とは・・・幼なじみみたいなもんかな」

新八「幼なじみなんですか？」

神楽「昔の銀ちゃんだったアルか？」

美來「そ、それは・・・」

銀時「もうその辺にしとけ。もう遅いから寝るぞ」

神楽「えー、銀ちゃんの恥ずかしい話とか聞きたかったアル」

そっぴいなながら拗ねている神楽。

美來「あのー」

新八「どうかしましたか？」

美來「お腹減ったので、何かくれませんか？」

新八「あ、いいですよー！」

そしてみんな仲良くご飯を食べましたとき。

第9話

晩御飯を食べ終わった。

晩御飯を食べ終わった後新八は自分の家へと帰って行った。

そして神樂は押し入れに入り「美來、明日銀ちゃんの昔話聞かせるヨロシ！」と、言って押し入れに入ってしまった。

私は銀時に「ちょっと散歩でもするか？」って言われたから「えームリ」って断っていたのだけど無理矢理外に連れ出された。

銀時「久しぶりだな、お前とこうやって話しするの」

美來「そうだねー、もう眠いなー、早く帰りたいなー」

銀時「つたく、お前なあ・・・相変わらずだなお前は。まあ前のほうがかわいかったけどな」

美來「悪かったですねー、不細工になってて。可愛くなりたいからお肌のために早く寝たいな」

銀時「・・・今何してんだ？」

美來「今？今は銀時にムカついてる」

銀時「・・・そう言うことじゃなくて、今、仕事何してんだ？」

美來「テキトーに・・・」

そう言いながら美來は俯いた。

銀時「美來。嘘つくな」

美來「っ！」

美來は昔から嘘をつくとき俯く癖があった。

銀時「相変わらずその癖は直ってねえんだな。いいからちゃんと言え。心配なんだよ。お前だけ今までどこにいるかわかんなかったんだから。心配ぐらいするだろ」

美來「そつか・・・。今は・・・殺し屋・・・やって・・・る」

銀時「なんで!？」

美來「仕方ないじゃん!那琉琥だつてどっか行っちゃうし・・・。ほかにどうしたらいいかわからなくて・・・誰にも頼りたくなくて自分でどうにかしなきゃって。殺し屋はすぐにお金が入るからバイトするよりいいかなって・・・だから」

説明してるといきなり銀時が抱きしめてきた。

銀時「つらかったんだろ?泣けばいいよ」

美來「っ!別につらくないし!泣かないし!」

銀時「いいから」

美來は、子供みたいに泣き続けた。

銀時「落ち着いたか？」

美來「う、うん」

銀時「それと、もう殺し屋なんてやめること！わかった？」

美來「う、うん。でも仕事どうし、あっ！」

銀時「どうした？」

美來「確か、変なゴリラっぽい人に真撰組の女中になればって言われたの思い出して」

銀時「それにしたら？」

美來「じゃあ明日行ってみようかな」

こうして明日、真撰組に行くことになったのだった。

第10話

次の日

美來は銀時に連れられて真撰組の屯所に来ていた。

銀時「美來、一人で行けるか？」

美來「行けるよ、それにいつまで子供扱いしてんの？殺すよ？」

そう言いながらにつこり微笑んだ。

銀時「美來さん？殺すよってひどいんじゃない？あーあ昨日の美來は可愛かったのになー銀さんの腕の中であんなに泣いちゃって……
うっ！」

話してる途中に銀時の腰に美來の蹴りが入った。

腰をおさえながら銀時はその場に崩れ落ちた。

美來「銀時黙らないと……殺すよ？」
やる

また美來は微笑んだ。

銀時「す……すいません」

美來「じゃ、電話するからお迎えよろしく」

そう言いながら美來は真撰組の屯所に入って行った。

その背中を銀時は見えなくなるまで見つめていた。

こんなに簡単に入れたけど大丈夫なのかな？

確かゴリラさんに…

ゴリラさん？そんな名前の人がいたわけ？でもゴリラって言った気が…ゴリラ…違う…ゴリラ…

あつ！確か近野？って感じだった気が…

あ！そういえば…銀時が

銀時「とりあえず近藤って奴が、沖田って奴が、大串君に話し聞いたら大丈夫だ」

美來「わかった、近藤、沖田、大串ね」

そつだ近藤だ！

えーと…あ！あの地味なくせにバドミントンのラケット振ってる人に聞いてみよ！

美來「すいません！」

山崎「はい！」

山崎はミントンのラケットを振るのをやめた。

美來「近藤さんどこにいるか知りませんか？」

山崎「局長ですか？局長なら、部屋にいますけど……あ！部屋はそこまがつてカクカクシカジカ」

美來「わかりました。ありがとうございます」

と、微笑んで近藤のもとへと向かったのだ。

山崎は美來の後ろ姿に見惚れていた。

山崎「た、大変だー！！」

第11話

えっとここか…。

はあ、あの近藤って人私のこと覚えてなかったらどうしよう…。

襖を開けようとすると、

……ん？話声がする。

土方「だ〜から！最近あの攘夷戦争で名を遺のこしたした金色の鬼神おにがここかぶき町で暴れまわってるって話が来てるんだよ！」

近藤「金色の鬼神おに？」

沖田「それ誰ですかイ？そんな名前聞いたことないですぜイ」

ガタッ！

土方「誰だ！」

や、やば！美來は必死に逃げた。その速さは普通の女性では考えられない速さだった。

沖田「誰も居ませんか？」

近藤「風じゃないのか？」

土方「人影が見えた気がしたんだが…」

近藤「それで誰なんだその金色の鬼神おにってのは」

土方「俺も詳しくは聞いたことないんだが」

その金色の鬼神おにってのはあの白夜叉と一緒に戦ってたとか。

見た目は名前のとおり金髪なんだって。

それにそいつが通った後は誰一人生きてる奴がいないんだ。

沖田「ふーん、…で、そんな奴がなんでまた」

土方「さあ？詳しいことはまだよくわからない。上からはそいつを捕まえるって、白夜叉と一緒にいる可能性があるから、だそうだ」

美來 side

なんでそんな噂が…。私じゃない…。もう、昔のことは忘れたいのに…。

どうしよう。このままじゃ銀時達にまで迷惑をかけちゃう…。

美來は無我夢中で走った。

第12話（前書き）

今回美來の過去？のお話です！

第12話

私は昔、戦場を駆けまわっていた。目の前にいる敵を無我夢中で殺していた。

こいつらの命なんて先生の命に比べたらどうでもいいし、比べるまでもないと思っていた。

生きてる意味なんかない。生きる価値なんてない。死ねばいい。

・・・でも、こんなことをして何か意味があるんだろうか？

いつも思う。

死んでるこいつらを見てこんな私なんか殺していいのだろうか。

本当に生きる価値がないのは私なんじゃないんだろうか？

何の意味なく生きてるのは私なんじゃないだろうか。

私のせいで死んでしまった人。私のせいで怪我をした人。何の権利もないのに人の命を奪ってしまった。

実際なんでこんな戦争をしてるのかわからなかった。

死人や怪我人が出てるだけ、本当に意味があったのだろうか。

人の命まで犠牲にしていたのにもかかわらず、

こんなことをして何か得るものがあつたのだろうか？

何も得なかった。

何も得ないまま終わってしまった。

失ったものの方が多すぎた。

犠牲也多いかった。

それなのにこんなことをして・・・

・・・意味が・・・・・・あつたのかな？

気づくと海辺まで来ていた。

そんなことを考えているといつのまにか辺りは真っ暗になっていた。

私はどうしたらいいのだろう？

生きてて何か意味があるのだろうか？

このまま今までであったことを胸の奥にしまいこんで生きていこうか。

『そんなことさせない。あなたはこの苦しみから一生逃れられないのよ』

頭のどこかでそんな声が聞こえた気がした。そしてあの戦争で殺した人たちの顔が思い浮かんだ。

ああ、私がしたことは許されないことなんだ。

それにこの苦しみを死ぬまで背をいつづけなければならないんだ。

それほどのことをしたんだな・・・と思った。

ならばもつこのまま死んでしまおうか、そう思った。

そして美來は、その場にブーツを脱ぎ、キレイに揃えて置き、いつも隠し持っていた小刀をブーツの隣に置いた。

そして静かに海に入って行った。

美來が歩くたびにバシャ、バシャという音がする。

体全体が海に入ったとき遠くで声が聞こえた気がした。

もう私をほっというて。

私にかまわないで。

もう私を・・・楽にして。

お願いだから。

第12話（後書き）

昨日ジャンプを買わせていただきました！

銀魂を見ると…なんと辰馬が！！

めっちゃうれしくて飛び跳ねちゃいました！！

今、鏡音レン君の歌聴きながら打ってます！

もうやばいです！！

第13話

意識がなくなったとき、松陽先生や銀時たちと過ごした楽しかった時のことを思い出した。

あのころは喧嘩とかしてたけどみんな仲良くて楽しかったな・・・

あのころに戻りたい・・・

美來「・・・」

「どう？」

気が付くと目の前に真っ白な天井があった。

私、あの時死のうとしたはずなのに・・・死ねなかったの？

？「気が付いたか？」

え？

声がしたほうを向くと

そこには黒髪で真撰組とかいうところの制服を着て偉そうに煙草を吸ってる男がいた。

美來「なんで私・・・こんなところに、それにあなたは？」

土方「俺は土方。ここは病院、お前は海におぼれそうになってたところを俺と俺の部下が助けたんだ、大丈夫か？」

美來「なんで・・・」

土方「・・・は？」

美來は土方に向かって思いっきり叫んだ。

美來「なんで助けたんですか！？そんなこと誰も頼んでなんかいないのに・・・あのまま死にたかったのに・・・なんで・・・なんで・・・」

土方「・・・何があつたか知らないが、落ち着け。」

美來「あなたに・・・あなたに何がわかるんですか？私の苦しみなんか知らないくせに・・・もう、これ以上苦しみたくないの・・・『逃げてるだけ』・・・そう思われても仕方ないかもしれないけど！！もう嫌なの、もうつらいの、苦しいの！もう死にたい、楽になりたいの」

美來は泣きながら訴えた。それを土方は黙って聞いていた。

土方「・・・お前に何があつたかしらねーが、過去のことなんか忘れたらいいだろ？」

美來「忘れられないの、気づいたらそのことばかり考えてて・・・もうどうしたらいいかわからない」

土方「いきなり全部忘れるなんてできないならちょっとづつ忘れていけばいいだろ」

その人はそういつて優しく微笑んだ。その言葉に私はとても助けられた。

その顔は私にはとても眩しかった。この人はなんて優しい人なんだろうか……。そう思った。

第14話

あの後、美來は退院した。

そのあと土方に万事屋の近くのファミレス前。

美來「あ、ここでいいです」

土方「あ、ああ。ホントにここでいいのか？家まで連れて行つてやるうか？」

美來「いえ、いいんです」

土方「そうか」

万事屋まで送ってもらわなかったのは、美來も少し考えたかったから。

銀時に真撰組に連れて行ってもらった日から3日たっているのだ。

つまり、美來は1日間意識不明の状態が続いて様子見のため1日入院していたのだ。

3日も連絡せずにいたのだから銀時と神楽ちゃんとメガネ君は怒っているだろう。

そのことの言い訳を考えたかったのだ。

さすがに、『自殺しようとして、そのあと助けられたけど意識が戻らなかったため病院で入院しました。』とは言いえないからだ。

土方「じゃあな、もう自殺なんて馬鹿なことするなよ」

美來「ありがとうございました」

そう言つて、土方はパトカーに乗って帰って行つた。

なんかよくわかんない人だつたな。

そう思い美來は万事屋へ足を進めたのだ。

万事屋玄関前

美來「ふう・・・」

もし聞かれても言い訳はちゃんと考えたし大丈夫。

ガラガラガラ

美來「た、ただいま・・・」

返事が返つてこない。誰もいないみたいだし、仕事にでも言つてるのかな？

そう考えているといきなり背中に言葉にならないくらいの激痛が走

った。

美來「つつ！」

美來は一瞬何が起きたのかわからなかった。

よく見たら神樂が泣きながら自分に抱き着いていた。

美來「か、神樂ちゃん！？どうしたの？」

神樂「『どうしたの？』じゃないアルよ！！今までどこ行ってたネ！？心配したアルよ！」

美來「ご、ごめん」

美來は言い訳を考えてるとき『どうせこんなこと言ってもどうせ「ふーん」、で終わるんだろうな。今までだってそうだったし、私のことを心配してくれる人なんていない』そんな風に考えていた。

それなのに、神樂が泣いてるのを見たとき死ぬほどうれしかった。

私のことを心配してくれる人がいるんだった。

美來「神樂ちゃん」

神樂「何アルか！ちょっと謝ったぐらいじゃ許さないアルよ！」

美來「ありがとう」

神樂「な、何アルか！！え、ど、どうしてないてるアルか！美來？」

美來「何でもないよ、ありがとね」

人に感謝したのってどれくらいぶりだろう。

第15話

神楽「・・・で、なんで帰ってこなかったアルか？」

美來の正面に神楽は座っている。

こちらをジーっと見つめている。

美來「えっ・・・と」

神楽「・・・」

美來「・・・」

神楽「・・・わかったアル。話したくないなら話さなくていいアル」

美來「神楽ちゃん・・・」

神楽「話したくないことだってアルネ！だから聞かないアル！」

美來「・・・ありがとう」

神楽「じゃあこれから買い物に行くアル！今日は私の当番ネ！」

そっ言い神楽は立ち上がった。

神楽「早くしないとおいてくアルよ！」

そっ言い玄関に走って行った。

美來「あ、待って！神楽ちゃん」

大江戸マート近辺

神楽「今日のご飯は何にするアルか？」

美來「うーん、そうだな。何がいい？」

そう言いながら、神楽を見た。

すると、神楽はにっこりと笑って、「たまごかけごはん」と答えた。

神楽にそういわれて美來は困った顔をした。

美來「・・・神楽ちゃん、たまごかけごはんってどんなのだっけ？」

笑いながら、「ど忘れしちゃった、アハハハハ」っと言っている。

それを聞いた神楽はたまごかけごはんのことを知らない人間がいた

なんて信じられない、と顔で美來に答えた。

神樂「た、たまごかけごはんは白いご飯に卵を、

美來「思い出した！！白いご飯にたまごかけてその上にマヨネーズぶっかけるやつでしょ！！あれは美味しいよね！じゃあこれからご飯を買いにいこー！！」

そう言うと美來は笑顔で歩いていく。

置いていかれた神樂は必死に思い出そうとしていた。

たまごかけごはんに「マヨネーズ」というものをかけるのか。

美來「神樂ちゃん！！おいてくよー！！」

神樂「あ、待つアル！！」

まあ、いつか。そう思い美來の後をついていった。

大江戸マート店内

美來「えーと、とりあえず卵何パックくらい買つといたらいいかな？」

神樂「いっぱい買っネー！！明日の朝と昼と夜とその次の日の朝と・・
・まあたくさん買っヨロシ！」

美來「わかった。たくさんだね」

そう言うとき美來は、卵のパックを軽く20個くらい入れた。

美來「足りるかな？これじゃ少ないよね？」

と、隣にいるはずの神樂に聞いたが返事がない。

おかしいな、と思ったら神樂はお菓子コーナーのところにいた。

はぐれてしまつてはダメだと思つた美來は、卵のパックをさらに10個追加して神樂のもとに向かった。

美來「何してるの？神樂ちゃん」

神樂「うわー！！美來びっくりするアルな。今、酢昆布買っか迷ってるネ」

そう言いまた酢昆布のほうに視線を戻す神楽。

美來「うーん、じゃあ今日は私が買ってあげる」

神楽「ほんとアルか！でも、悪いアルよ」

そう言い俯いた神楽。

美來「いいよ、心配かけちゃったから」

神楽「じゃあ、銀ちゃんたちにも買って行くネ」

美來「うーん、じゃあ何にする？・・・あっ！」

そのまま美來は新商品コーナーに向かった。

そして新商品のメガネ型チョコを手にとった。

（これ、メガネ君にあげよつと）

そのままカゴに入れた。

神楽「美來！！決まったアルよ！」

そう言いながら走ってきた神楽の手の中にはたくさんのお菓子があつた。

その手には3分の2が酢昆布だった。

美來「・・・酢昆布多いよね、そんなに酢昆布好きなの？」

神楽「大好きネ!!」

美來「そっか、じゃああとはマヨネーズだね」

神楽「じゃあ、早く行くアル!!」

その頃万事屋では

銀時は寝ころびながら、ジャンプを読んでいた。

その銀時に向かって新八は話しかけた。

新八「銀さん」

銀時「んー？」

新八「さっきお登勢さんから聞いたんですけど、美來ちゃん帰ってきたそうですよ」

銀時「ふーん」

返事しながらまだジャンプを見ている。

新八「よかったですね」

銀時「別に、このまま帰ってなくていいけど。で、どこにいるんだ。」

その返事を聞いて新八は笑いながら答えた。

新八「今、神楽ちゃんと晩ごはんの買い物に行ってるそうですよ」

そんなのんきなことを言ってる新八だったが、この後あんなことが起こるとは予想もしていなかった。

第16話

美來・神楽「ただいまー」

新八「お帰りなさい」

美來「ごめんね、メガネ君。心配かけて、そのお詫びにお菓子買ってきたの。はい、これ」

と言ってメガネ型チョコを渡す。

そのあと美來はトイレに向かった。

新八「メ、メガネ・・・」

その後ろ姿を見ながらボソっとつぶやいた台詞に美來はきずいてなかった。

神楽「銀ちゃんにもあるアルよ！！イチゴ牛乳とかいっぱい買ってきたネ」

銀時「おー。新八、冷蔵庫いれとけー」

新八「はいはい、わかりましたよ」

そう言つて冷蔵庫に向かう。

冷蔵庫の前で思い出したように新八が神楽に聞く。

新八「あ、今日神楽ちゃんが晩ごはんの当番だね。何にするの？」

神楽「たまごかけごはんアルよ！！あ、銀ちゃん、新八台所入ってきちゃダメアルよ」

銀時「へいへい」

新八「わかった」

台所

美來「ごめん、神楽ちゃん待った？」

神楽「遅いアルよ！そーいえばマヨネーズはかけたい人だけ書けたらしいと思うネ！」

美來「そうだね。好き嫌いもあると思うし。よし、じゃあ早く用意しちゃう！」

神楽「銀ちゃん、新八できたアルよ！」

銀時「できたってご飯に卵のつけるだけじゃねーかよ」

新八「まあまあ、じゃあ食べましょうか」

銀・神・美・新「いただきますーす」

みなでいただきますを言った後美來がマヨネーズを取り出しかけ始めた。

その様子はどこかで見たことがあった。

神樂は気にせず食べているが銀時と新八は固まっていた。

2人は目で会話している。

新八（銀さん！！もしかして・・・）

銀時（知らねー、昔の美來はこんなことしてなかったぞ！！）

ずっと美來を見ていると。

美來「どーしたの？あ、もしかしてマヨネーズいる？気づかなくて

ごめんね。今かけてあげるから」

そう言い銀時と新八のお茶碗を取った。

銀時「ちょ、待って!!」

新八「あ・・・」

美來「さあ、召し上がれ」

笑顔でたまごかけごはん美來バージョンを渡してきた。

こうして楽しい楽しい夕食の時間が過ぎて行った。

その頃

春雨第七師団では・・・

？「初めまして、神威殿、阿伏兔殿。私、花柳様^{かりゅうさま}に仕えさせてもらっている夏と申します。隣にいるのが空です。」

神威「初めまして」

そう言いながらにこにこ笑っている神威。

神威の前に現れた女と男。夏と空。女のほうは左目は髪の毛で隠れておりあとの髪は横に一つにまとめてある。男のほうは前髪が長くて顔があまり見えていない。

神威「で、何しに来たのー？」

夏「今回神威様のところに来たのは、花柳様から伝言を伝えに来ま

した」

そう言い空がある紙を阿伏兔に渡した。

阿伏兔「これは？」

夏「それは江戸を消滅させる武器の設計図です。もう完成しております。名前は『月雅^{げつが}』。詳しいことは後程お知らせします。では」

そう言い残し出て行った。

神威「どうするー？阿伏兔？これやんなくちやいけないの？」

阿伏兔「すつとこどつこい、やらねーと命がなくなるぞ」

神威「でも、面白そうだね。地球っていったら銀髪のお兄さんもいるしね」

阿伏兔「はー、もう勝手にやれ」

第16話（後書き）

阿伏兔のしゃべり方が難しい><

第17話

阿伏兔「・・・花柳って言ったら第六師団団長じゃあねえか」

神威「何？阿伏兔知り合い？」

阿伏兔「知り合いつてほどじゃあねえけど最近、第六師団団長になった奴だ」

そう言いながら神威を見たが、神威はニコニコしながら外を見ていた。

そんな神威を見ているといきなり振り返り

神威「それでその紙には何て書いてあるの？」

と、聞いてきた。

そう言われた阿伏兔は慌ててさっききた花柳の部下が渡した紙を見た。

阿伏兔「中は、あの月雅って言う武器の設計図と・・・これは・・・」

神威「なにになに？」

神威が阿伏兔に近づく。

そして、手元を覗き込んだ。

神威「・・・ふーん、これはおもしろそうだね」

- - - - - 頃の花柳と夏 - - - - -

夏「あの二人この話しに、のってくるでしょうか？」

花柳「のってくるぞ」

夏「そうですね、のってきてもらわないと、あの方のためにも・・・」

- - - - - 1週間前 - - - - -

あるところだ・・・

??「花柳、1週間前から地球で金色の鬼神が暴れまわっとるようだな」

花柳「はい、まだ詳しいことはわかっておりませんがそういう噂を最近耳にしますね。上の方たちは今、必死に探しているそうですが私たちはどうしましょうか」

??「・・・金色の鬼神・・・か・・・」

そう言い外を眺めている人物に向かって花柳は聞く。

花柳「どういたしましょうか？」

??「・・・使えるかもしれないな。花柳、行って来い。」

花柳「はい」

そう言い花柳は、部屋を出た。

??」「・・・生きていたのか、金色の鬼神・・・ふ、ふふふ
ふ、はははははは」

部屋の中には、笑い声が響いた。

第17話（後書き）

パソコンのキーボード壊れてるんで更新遅くなりました。

第18話（前書き）

パソコンやっと治りました！

第18話

『江戸消滅計画を承諾してくださるなら第6師団団長室に来てください。詳しいことはそちらでお話しします。』

神威たちは、この計画に参加するため第6師団団長に話を聞きに行く途中なのだ。

神威「楽しみだね、地球には、強いお侍さんがいるってここに書いてあるけど、これ全部殺しちゃっていいのかな？」

いつもの笑顔で阿伏兔に聞いた。

阿伏兔「いいだろ、ここにもちゃんと書いてあるし。『この計画に参加していただけるなら地球人をどれだけ殺しても構いません』って。けど、団長」

神威「何？阿伏兔？」

阿伏兔「これから、第6師団団長に会いに行くんだくれぐれも粗相のないようにしてくれよ」

神威「はいはい、わかったよ」

第6師団団長室前

コンコン

神威「第7師団団長、神威です」

夏「お入りください」

ガチャ

バタン

夏「花柳様、神威様と阿伏兔様が来られました」

花柳「ここに来たということはこの計画に参加してくださると思っ
ていいのですか？」

そう言い花柳はこちらを向いた。

花柳と呼ばれた男は髪が長く、その黒髪は腰くらいまであった。そ
して、目をつぶってこちらを向いていた。

神威「いいよ。けど、強い奴は俺が殺しちゃってもいいよね」

花柳「まあ、お茶でも飲みながら向こうで話しましょう。夏、お茶
を」

夏「はい、わかりました。あ、花柳様これを」

そついい夏は花柳に杖を渡した。

それを見た阿伏兔は

阿伏兔「どこか悪いんですか？」

花柳「少し目が……。まあそのことも含めて話しましょう。空^{くう}、神威さんたちを案内してあげてください」

花柳がそついうと部屋の隅から空が出てきた。

神威「うわ、いたんだ」

阿伏兔「団長！失礼なことを言うな！すいません」

花柳「いいんです」

そして空は無言で神威と阿伏兔の手を引き隣の部屋に連れて行った。

急に引つ張られたので神威と阿伏兔は

神威「おっと」

阿伏兔「うわっ」

その後を花柳、夏と続く。

花柳「すいません。空は無口なもんで全然しゃべらないんです。」

阿伏兔「そうなんですか。」

そついい空を見る神威と阿伏兔。相変わらず部屋の隅に立っている。

花柳「では、話しましょうか。と、言っても前に夏と空が渡した紙にほとんど書いてあるんですが、何か質問がありますか？」

神威「さつきも言ったけど強い奴は俺が殺しちゃってもいい？」

花柳「いいですけど、1つだけ条件があります。その条件はこちらにある人物を渡してほしいんです」

阿伏兔「渡してほしい人？」

花柳「はい、その人は『金色の鬼神』と呼ばれています」

神威「金色の鬼神・・・」

夏「金色の鬼神は攘夷戦争の時にあの白夜叉と一緒に戦っていたと聞いています」

神威「白夜叉・・・」

阿伏兔「その情報は確かなんですかい？」

そつ言い夏を見た。

夏「はい。確かだと思います」

花柳「その条件を飲んでいただけたら後はあなた方の好きにしてください。構いません。私たちは今日から1週間後にここを出発します。ですのでそれまでにあなた方も地球に行ってください」

神威「阿伏兔、金色の鬼神だつて。どれくらい強いんだろうね」

そういい先に進む神威。

阿伏兔「団長、面倒事はやめてくれよ」

そういい追いかける阿伏兔。

第19話

・ 神威たちが1週間後の出発の日まで準備している中、美來たちは・
（準備しているのはほとんど阿伏兔です）

美來「暇だね・・・。」

神楽「暇アルな・・・。」

銀時「・・・。」

今日は、依頼が何もなくすることがなくて暇なのだ。
新八はというと、お通ちゃんのライブに出かけているため休みなのだ。

美來「ひまあ」

神楽「暇アル」

銀時「ああもう、うるせえなあ。そんなに暇ならどこかで遊んで来い」

美來「えー、どうしよっかな。神楽ちゃんどうする？」

神楽「行ってもいいけど、酢昆布代だすアル」

銀時「何で、お前のために金出さなきゃいけないーんだよ。さっさと行って来い」

神楽「いいから、早くだせヨ」

銀時「・・・はあ、しかたねーな。ほらよ」

神楽「わーい、銀ちゃんありがとネ。ほら、美來行くアルよ!」

美來「あ、神楽ちゃん待つて。じゃあ、行ってくるね」

銀時「おう」

そついい、美來と神楽を見送った銀時だった。

神楽「あー」

この日は暑かったので銀時にもらったお金で酢昆布とジュース買って飲んでいた。

美來「それにしても暑いね」

神楽「そうアルな」

そんな会話をしていると後ろから

沖田「あり、チャイナこんなところで何してるんでイ」

という声が聞こえた。

神楽「あ、サド。こんなところで何してるあるか？またサボリアルか」

美來「神楽ちゃん、この人、誰？」

神楽「ああ、こいつはサドアル。名前どおりドSなやつアル」

美來「ふーん、サド……。変な名前ですね」

そう言つて笑いかける美來。

沖田「おい、チャイナ。俺の名前はサドじゃないですぜイ。沖田総悟つていう名前があるんでイ。あ、すいません。チャイナにはわからなかったですかイ」

神楽「それくらいわかるアルよ！」

そう言い返す神楽を無視して沖田は美來に名前を聞いた。

美來「あ、すいません申し遅れました。美來と言います。よろしく

お願いします」

沖田「よろしく願いしますア。ちょっと質問いいですか」

美來「なんですか」

沖田「アンタはSですか？それともMですか？」

美來「えっと私はどっちかというとMだと思います」

沖田「ふーん、そうなんですか」

美來は答えて思ったがこの会話というかこの質問自体ちょっとおかしくないかと、思った。

そんな会話をしていると、

女「ちょ、ちょっとやめてください」

向こうで天人が女の人に絡んでいた。

女「離してください」

天人「うるせーな、お前ら人間はこの、カイザーフェニックス様のいうことさえ聞いていればいいんだよ」

天人が女にしつこくからんでいたので沖田と神楽が助けに行こうとしたその時美來がその天人に話しかけていた。

美來「ちよつと、その天人さん。その人話してあげなよ。嫌がってるじゃん」

天人「あん？お、なんだこの女もいい女じゃないか。お前もついてこい」

そっぴい美來の手をつかむ。

それを見て沖田と神楽が駆け寄った。

美來「離せ」

そっぴい美來の声は今迄に聞いたことのないくらい冷たい声だった。

天人はいうことを聞かない未來に腹が立つたのか美來を殴った。それを見た神楽が美來！と呼んだが美來からは何の反応もなかった。

すると美來は刀を持って天人の腕を切り捨てた。腕を切られた天人は痛みと自分の腕がとんだことにびっくりして叫んでいた。

天人「う、うわアアアアアアアア！！！！！！お、おれの腕がアアアアアアア！！！！」

女「キャ、キャー！！！！」

そっぴい女性に美來は「もう大丈夫よ」そっぴい優しく微笑んだ。

そう言われた女性は礼を言ってその場を立ち去った。

天人は「覚えてろよ!」と、いうとその場を立ち去った。

そして美來はその持っていた刀を沖田の腰に差すと神樂に微笑み

美來「帰ろうか」

そういい歩き出した。

神楽「うん」

そついい後について行った神樂。

その美來の後姿を沖田はずっと見ていた。

第19話（後書き）

これ書きながらスポンジボブの歌を歌っていた作者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7608s/>

また逢う日まで

2011年10月8日18時06分発行